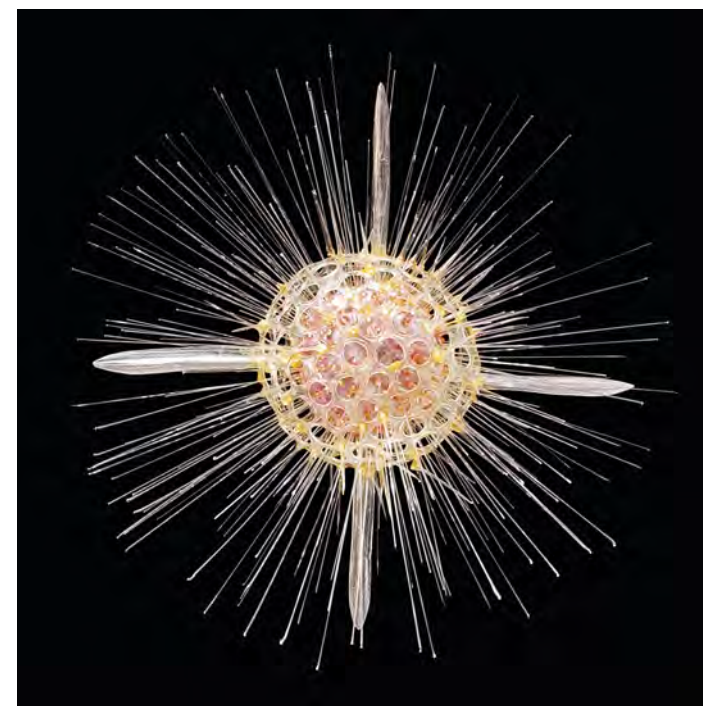




ガラス工芸家のレオポルド・ブラシユカと息子のルドルフ・ブラシユカは、海の生き物をガラスで象った。デリケートな海洋生物を生きたまま捕捉する術がなかった時代にあつて、このようなガラスのモデルは観賞用の水槽としての役割を果たしていた。ブラシユカ親子は、放射虫(上)など微小生物を知るための教育的なモデルも作成した。また、対象生物にはマダコ(左)、トレモクトバス・ヴェリファ(24ページ)など、イカやタコの仲間もあった。[25ページ]
(左上から時計回りに)モスソクラゲイカ、アオイガイ、ヨーロッパコウイカ、オニキア・ブラティブテラ。



ガラスの水族館

ガラス細工の繊細な海の生き物たちは、ブラシユカ親子が生涯を捧げた自然史博物館への贈り物だった。

文 ウルフ・ライザー

1853年5月、31歳のレオポルド・ブラシユカは北米に向かう船の上にあった。父親と妻を立て続けに亡くしたばかりだった。忘却と新生活のはざまにある日々が、荒波のなかで、恍惚と漂っていた。想いに没りながら、レオポルドの視線は大西洋の千尋に引き込まれる。そして、偶然にも、群生するオキクラゲが夜のバレーに興ずるシュールな姿を目撃する。暗闇で光るクラゲだ。翌日の日誌にこう書き記した。「その時、私たちの目の前に小さな生き物が現れ、けばけばしい緑がかつた光が、どんどん大きくなっていった。その間、おそらく1匹の魚と思われる黒い影が、光る生物の間を突進していった。うつとりと見とれている人たちを魔法の世界に誘っているかのようだった」。レオポルドは、この甘美な世界に入り込み、スケッチブックにエキゾチックな海の生物を描写するようになった。

ブラシユカ家は、ボヘミア北部(現在のチェコの一部)で何世代にも遡る、ガラス工芸の名家だった。12世紀以来、この地域で由緒あるいずれの一族も、木材、玉石、水晶、酸化鉛を独自の方法で利用し、さまざまな機能を備えた道具や、手軽な日用装飾品、きらびやかな装身具などを製作していた。そして、このような家伝の技術は、貴重な宝物と同じようにしっかりと守られていた。ブラシユカ一



PHOTOGRAPHS: NATURAL HISTORY MUSEUM, LONDON

族は、ガラス工芸の名家としての地位をいち早く築き、贅沢なクリスタルのシャンデリアや、精妙なカットグラス、金メッキのカラー・ゴブレットなどを貴族階級の宮廷の住人のもとに届けていた。学校を出た後のレオポルドは、金細工と宝石研磨の訓練を受けていたが、早い時期から新しい分野を開拓したいという強い衝動があった。絶え間なく散歩に出掛けている、草木や草花をスケッチし、自宅に戻るとこれをエレガントに輝くガラス装飾に変身させていた。息子のルドルフが生まれた1857年、蘭のモデルをつくり始めるが、実物大のそれは瞠目するほどに本物そっくりで、学術界の専門家やプライベートのコレクターたちを驚嘆させた。レオポルドの作品を絶賛したドレスデンの自然史博物館は、エルベ川の河畔の村に別荘とスタジオを用意し、彼をこの地域に招請した。

レオポルドの職人気質とアバンギャルドな芸術性に裏打ちされた、精密で自然主義的な作品は、19世紀後半の精神を先取りしていた。時は、植民地主義的な熱狂で、探検と計測の活動に明け暮れた時代だった。世界中の主な都市で、研究機関や博物館が次々と登場していた。写実的な実物大のガラス製オブジェクトを扱っていたレオポルドは、時のニーズを満たしていた。1870年頃から息子ルドルフも仕事に参加し、ふたりはじきに、日本、インド、アメリカでも顧客を開拓して世界的な名声を勝ち取るようになった。

レオポルドは主に植物のモデルに幅広く取り組んでいたが、ある時、魔法のような海洋の世界、水面下の光のスペクタクルショー、ボルカを踊るイカやタコのことをはたと思い出した。巨大な海洋水族館が建設されたのを機に、ブラシユカ親子は、イソギンチャク、巻き貝、海綿動物など、実物さながらの息を呑むようなガラス製のオブジェクトを次々と生み出していった。そこにはもちろん、あの神秘的なクラゲの姿もあった。ブラシユカ親子は研究者や科学者に、それまで誰も見たことがないような、まるで生きているかのように精緻な作品を提供するだけでなく、人類の起源

である海の生命を垣間見る機会も与えた。ロマンチックな見方をすると、はかない瞬間を永遠に変えるものだった、ともいえる。コレクターの目で見れば、最高の芸術性を有した魅惑の逸品であった。これはつまり、軽妙かつ絶妙なエレガンスと神の領域にも迫る才能によって、ブラシユカ親子がアートとクラフトとサイエンスに同時に革命をもたらしたといえるだろう。レオポルドは、疑いのあるまなざしに向けた専門家に礼儀正しく答えている。「私たちが何か神秘的な装置を持っているのではないかと、多くの人が思っているようですが、そうではありません。必要な技術があるだけです。その点では息子の方が優れているでしょう。何と



「いつでも私の息子ですから」。

最盛期のふたりは、直感によって易々と作品を仕上げ、実務的で憂いのないス

ズムのような効率で仕事に精を出していた。レオポルド

が当初から大きめの部品を扱い、全体構成の組み立てに傾注する一方で、息子のルドルフは複雑なディテール、細かい装飾や表面仕上げ、マジカルな最終デザイン効果などを担当していた。ハーバード植物博物館で伝説的な人物となったジョージ・リンカーン・グッデル館長は、1886年にブラシユカ親子のもとを訪ねている。この時、彼の目の前で行われていた作業が、最終的に自分の知っているものに変身するとは思ってもよらなかったという。グッデルが立ちつくしていた暗がりのパンガローには、ガラスチューブの破片、粗末な作業テーブル、巻かれた銅線、硝石の塊、塩や顔料の入った容器、年季の入ったふいご、冷却水のたらい、毒性酸化物で満たされたブリキ鍋、炭

酸カリウムの平鍋、赤々と燃える珪瑁炉などでごった返していた。うだるように暑い、混沌とした作業場で、ふたりのマスターがプロセスをこなしていく、その信じがたいスキルを唾然としながら見つめていた。秒単位のタイミングで加熱、吹き込み、整形、合体が進行していく。細心の配慮で無数の色素が混ぜ合わされ、厚みの異なる板が合体し、質感のある表面が生まれる。極細の銅線を精密に動かすことで、ヒレやエラや眼球が出来上がっていく。あたかも、神の創造のプロセスを目標しているような感覚であったという。ブラシユカ親子は1890年以降、作品の提供でハーバード大学と独占契約を結んだ。何千という植物や動物のモデルがつくられ、そのすさまじい生産性は贅沢な展示カタログとして記録されている。

1895年にレオポルドが亡くなり、息子のルドルフが稼業を受け継いだ。しかし、ブラシユカ親子は弟子を雇ったことも教育したこともなく、秘密主義が当然とされた文化背景も手伝って、仕事に関する記録や手紙などはいっさい残さなかった。その結果、子どもにないルドルフが1939年に亡くなると、蓄積されてきた名家のノウハウは、彼の亡骸と共にドレスデン近郊の一族の墓に眠ることとなってしまった。そしてその後のドレスデンの大空襲によって、オリジナルのデッサンの多くが焼失してしまった。ポヘミアの魔術師の輝かしい文化遺産は、二度と復元することができなくなったのだ。今日に至るまで、ハーバードのハイテク技術を駆使しても、ブラシユカ親子が残した海洋生物のクオリティと美しさに近づくことはできない。今となつては、ロンドン、ウィーン、ピサ、チュービンゲンなどの大学機関や博物館の時折の好意にあずかって、この魔法の領域の片鱗を眺めることができるのみだ。大変に残念なことではある。だが一方で、偉大な芸術というものが、何ものにも代えがたく、限られた存在であることを私たちに教えてくれるのだ。◆

「パテックフィリップ マガジン・エストラ」(pathe.com/owners)にて、この記事の特別関連コンテンツを閲覧いただけます。